

大学院生プロジェクト型共同研究・研究成果報告

報告者：平泉 拓（臨床心理研究コース）

■ 研究題目
不登校問題におけるスクールカウンセラーの効果的なアプローチ方法の検討
■ 研究グループ氏名
平泉拓（臨床心理研究コース 博士後期課程1年）（代表者） 森真理（臨床心理研究コース 博士前期課程2年） 栗田裕生（臨床心理研究コース 博士前期課程1年） 野平靖子（臨床心理研究コース 博士前期課程1年） 宇佐美貴章（臨床心理研究コース 博士後期課程2年） 板倉憲政（臨床心理研究コース 博士後期課程2年） 狐塚貴博（臨床心理研究コース 博士後期課程3年）
■ 研究実施過程
2011年 7月……調査1 文献検討（文献精読） 2011年 8月……調査1 文献検討（データ加工, 及び分析） 2011年 9月……調査1 文献検討（データ加工, 及び分析） 2011年 10月……調査2 インタビュー調査（質問紙作成） 2011年 11月……調査2 インタビュー調査（データ収集, 及び加工） 2011年 12月……調査2 インタビュー調査（データ収集, 及び加工） 2012年 1月……調査2 インタビュー調査（データ収集, 及び加工） 2012年 2月……考察, 及び論文執筆 2012年 3月……フィードバック
■ 研究成果概要（目的, 実施内容, 成果, 新たな課題など）
1. 目的 本研究は, 中学校における不登校問題に対するスクールカウンセラーの効果的なアプローチ方法を検討することを目的とした。調査1では, 不登校問題に関する事例論文を数量的に検討し, 調査2では, スクールカウンセラーを対象としたインタビュー調査を行った。これらを通して, スクールカウンセリングの効果的なアプローチ方法に至るエッセンスの抽出を試みた。

2. 実施内容

調査1では、不登校問題に関して2000年から2010年にかけて発表された事例論文19篇21事例を、発行年別文献発行数、不登校生徒の学年、不登校生徒の性別、支援期間、面接回数、支援体制、支援開始のきっかけ、SCが働きかけた相手、用いられた技法、支援終了時の様子について数量的に検討した。調査2では、スクールカウンセラー15名を対象とした半構造化インタビューを行った。インタビューでは、不登校問題に効果的にアプローチできた事例及び、効果的にアプローチできなかった事例を想起してもらい、それぞれの対応プロセスについて聞き取りを行なった。

3. 成果

本研究の成果は次の通りである。第一に、不登校問題に対する効果的なアプローチ方法の指針として、複数の支援者が関わり、連携することの重要性が示唆された。本結果においてスクールカウンセラーは、効果的にアプローチできた事例では、担任教師と綿密に連携して対応しており、さらに複数の校内支援者と携わっていた。したがって、今後は校内組織体制に着目して、組織体制が構築されるプロセスや要因について知見を深めることが期待される。第二に、スクールカウンセラーが担任教師と日常的に関係づくりを行なうことの重要性が示唆された。スクールカウンセラーが不登校支援に携わるきっかけは、担任教師によるリファールが全体の半数を占めていた。また、効果的にアプローチできた事例においては、スクールカウンセラーが支援プロセス全体を通して担任教師と良好な関係を築いていた。したがって、今後はスクールカウンセラーと担任教師との関係性に着目して、どのように関係性が構築されるに至ったかについて知見を深めることが期待される。第三に、不登校生徒と保護者の双方に対して働きかけることの重要性が示唆された。今後は、スクールカウンセラーと生徒及び、保護者との関係構築に着目し、関係が構築されるに至るプロセスや要因について知見を深めることが有益であると考えられる。

4. 新たな課題

本研究では、事例論文の数量的検討と、インタビュー調査を行なったが、そこで得られた知見は少数のサンプリングに基づいていることから、得られた知見を一般化することには慎重になる必要がある。今後は、追加的なインタビュー調査及び、質問紙調査を行なうことが期待される。